
ウィザーズ・ネクサス

椋滝 秋乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザーズ・ネクサス

【Nコード】

N0538Z

【作者名】

椋滝 秋乃

【あらすじ】

魂の力を利用した事象干渉技術 魔法の実験の失敗により、日本のほとんどが密林におおわれてしまった近未来。悲劇から三十年後、人々は各地に要塞都市を築き、森海を呼ばれるようになった身近な異界と共存していた。一定の安寧を手に入れた世界で、二つの要塞都市をまたにかけた魔法使いたちの物語が始まる。（サークル投稿作品の改訂版です。）

林海都市の魔法使い 1

1

立ち並ぶ廃墟の群れの中を、深山^{みやまのうし}嵐は早足で進んでいた。

小柄な少女は、頭のとっぺんから足の先まで緑一色だった。モザイク模様の野戦服にはダークグリーンの装甲が体の凹凸を隠すように取り付けられているため、外見からは性別すらわかりにくい。小さな顔は迷彩塗料をべったりと塗りたくっているが、目深にかぶったヘルメットからのぞく瞳には十代らしいあどけなさが見て取れた。服と同じく迷彩で統一した大型のザックを背負い、肩には細長いライフルケースをかけている。

ジャングルで戦う兵士そのままの姿は、これまでの長旅をうかがわせるほどくたびれていた。うつすらとほこりをかぶった着衣やザックはほつれが目立ち、ヘルメットやライフルケースの表面は微細な傷にまみれている。

ひび割れたアスファルトを、泥だらけのコンバットブーツで踏みしめて、人の気配のない廃村を突き進む。

密林用の迷彩に廃墟とくれば、どこか日本から遠く離れた戦場を連想するだろう。だが廃屋に置き去りにされた表札は、ここが間違いない日本であることを主張していた。

住人がいなくなつてから三十年が経過し、すでに地図からも消されていた。元々はそれなりに大きな山村だったらしい。雑草と長年の風雨に侵され、朽ちようとしている木造の民家が視界の片隅を流れていく。

大きいといっても四方二キロ程度の山村だが、重装備の少女が横断するかなりの体力を要求される。しかし嵐は多少の悪路などものともせず、十分なペースを保っていた。

あつという間に村の外れに辿りついたところで、嵐は足を止めて腕時計を見下ろした。

それから空を見上げると、すぐその小高い山の真上で太陽は柔らかな春の日差しを振りまいていた。日は今が最高点で、これから緩やかに落ちていく。

「中継地点^{キャンブ}まで十キロ。ギリギリかな？」

緑と黒のまだらに塗られた唇が冷静な声色を刷く。

彼女の装備の配色は、自然一色の森林で身を隠すことを目的としており、十キロメートルというのは村を出て、その姿が最適となる地域を進む距離に相当した。

数瞬の間を持って、「風は結論を出した。

「途中で夜になったらやだな」

アスファルトの割れ目で靴底のごみを削り、服のそこかしこについた葉っぱや小枝を取り除く。今日の野営はここで決まりだ。

昔から森の独り歩きは避けられてきたが、現代の森林が内包する危険性はどの時代よりも高くなっていった。足場の悪さや曖昧な方向感覚に足を引っ張られるし、ぐずぐずして夜になれば死の危険は倍加する。

そして、なによりも注意しなければならない『敵』の存在。

「もうちよつと、行けると思ったんだけどなあ」

止まるのも英断とはいえ、今日中に人気のあるところに到着しようと思ってきたところでまた行程に遅れを出してしまい、風は疲労と一緒にため息を漏らした。ちなみに彼女は、この村にたどりつくまで今日だけで道なき山道を十五キロ以上も踏破していた。体重の半分に差しかかるうという装備を背負って、である。

「ま、久々に屋根付きだし、よしとしよう」

一人で呟いて周囲の民家をぐるりと見回す。相当に痛んでいる家ばかりだが、ほとんどが原型をとどめていた。日本の建築技術の賜物だが、家がどれだけ待とうとも、もう誰も帰ってはこない。

「魔法災害からもう三十年、か」

生まれるよりずっと昔のことに想いを馳せ、胸の奥に隙間風が通るような虚無感を飲み込む。

取り残された村を見まわしていると、嵐は他の建物から頭一つ抜き出た鉄塔を見つけた。

消防の物見やぐらだ。その足元に立つてみると、鉄塔は思ったよりずっと高かった。二十メートルはあろうかという長身には錆びが目立ったが、その上に広がる青空にそれでも胸を張っていた。あと十年はこの村を見下ろし続けるだろう。

「のぼってみるか」

村の全容も把握したかったし、嵐は高いところが元々好きだった。のぼる手段を探して周囲を歩いてみたが、どうやら梯子は途中で折れているらしい。

「しかたない。アオイ、重力干渉。いいね？」

『了解。重力制御魔法、スタート』

その呼び掛けに、姿なきアオイが、抑揚のない合成音声で答える。音の発信源は旧式のトランシーバーに似た携帯端末だった。

嵐は足場を軽くならすと、両足に力を蓄える。それからやぐらのてっぺんに狙いを定めて、飛んだ。

ふわりと重力の束縛をすりぬけて、荷物を加えた重量六十キロ以上の体が上昇する。あつという間にてっぺんに達し、錆びだらけの最上段の手すりをつかまえた。

『慣性制御、荷重移動』

アオイが端末から言うと、上を向いていたベクトルが折れ曲がり、手すりを支点に倒立前転の要領でやぐらの最上階に着地する。錆びついた手すりも格子の床もまったく軋まなかった。

嵐はヘルメットをずらして視界を広げ、腰のポーチからコンパクトタイプの双眼鏡を取り出す。ベルトには他に水筒とハンドガンが吊るされていた。

だが、双眼鏡を覗く前に、嵐は眼前に広がる光景に圧倒された。

蒼と碧の二面世界。かすみがかったステンドグラスの空と自然の原色。蒼穹の見守る下で、谷間に放置された村を両側から圧迫する小山も、もう耕されることのなくなった田畑も同じ春の新緑で覆わ

れている。

そして、そのさらに向こうに広がる濃緑の海。村を出て少しの所から始まる扇状地を抜けて、何十キロも離れた対面の山脈までを埋める原生林。東南アジアかアマゾンか、というような規模の森林地帯が広がっていた。

森海。それが、その圧巻的な大自然につけられた名だった。

「叫びたくなっちゃうね」

『敵に発見される可能性が高まります』

「わかってるって」

起伏のない音声でたしなめるアオイに苦笑を返す。でも腹の底から叫ぶことができたら、魂の奥まで風が通るだろう。疲労と我慢を溜めて淀み始めた精神には何よりも必要かもしれない。

とはいえ衝動に突き動かされるわけにはいかず、風は双眼鏡を持ち上げる。

その視線は、どこよりも遠くへとそそがれていた。

西暦二〇七八年、林海都市東方約七十キロ地点の廃村にて。

林海都市の魔法使い2

緑の中を駆け抜ける。

膝の高さで生い茂る低木を踏みつけながら、凧は名前の通り風になつて、乱立する木立をすり抜けていく。荷物とライフルケース背負ったままでも最高の敏捷性を発揮できるのは、魔法による重量軽減のおかげだ。

そのおかげで息は乱れていないが、迷彩色に塗りたくった顔には、深い緊張が張り付いていた。

「障害物競走みたい」

『それよりは、鬼ごっこに近いかと』

「そうだね」

アオイ 情報端末に搭載された支援AIがよりの確に状況を評価するが、会話を介して凧の精神状態の調整を図っているだけなので、凧も頬を少しだけ緩める。

「撒けそう？」

『不可能。交戦は必至かと』

「だよな」

AIと意見を一致させて低く唸りながら、さながらハードルの選手のような身のこなしで、ブッシュをかき分け跳び越えていく。高速で過ぎていく木々がまるで壁のように視界を圧迫した。

あの廃村を出て二日、最後の中継地点を経てあとはノンストップだと注意を欠いたせいで、やり過ごせた脅威を引きつけてしまった。「土地走査、終わってる？」

『ご心配なく。あと百メートルです』

凧もただやみくもに走っているわけではなく、少しだけ戻る進路をとっていた。森海は時間とともに姿を変えるため、詳細なマップピングを常に行っているから、もと来たほうに戻る方がなにかと便利なのだ。

アオイの誘導に従いながら肩越しに振り返る。背後には不気味に沈黙する木立があるだけで、鬼ごっこの鬼の姿はない。茂みや木陰を使って巧妙に隠れながら、執拗に追いつがってきているのだろう。顔を前に戻すと、途端に視界が開けた。森の薄暗さに慣れていた目が奥の方で鈍く痛むが、かまわず走り抜ける。

嵐が目指していたのは、この木立の空白地帯だった。広さは小さな公園程度だが、無秩序な森海の中にあつてここだけは整備の痕跡がある。元は調査隊のキャンプでもあったのだろう。

嵐は振り返りながら足元を確認する。背の低い雑草が生えているくらいで動きにくさはない。

巨大なリュックを落とし、脇に立てたライフルケースの開閉パネルを操作する。モーターの小さな駆動音とともにケースが展開し、剣の柄がせり出した。

ケースに格納されていたのはライフルではなく、一振りの長剣だった。片手用の両刃剣、バスタードソード。近接武器というより精密機械的な印象を持つツヤ消しされたダークグレーの刀身は、チェインソーのエンジンを小型化したような機械によって柄と連結されていた。

法器。それが現代の魔法使いの杖であり、武器の形をした、より高度で精密な兵器システムの総称だった。剣を抜き柄の感圧センサーを通して安全装置を解除すると、鰐の機械 機関部の下部がスライドして排熱口が開く。

『演算領域確保。魔力供給良好』

アオイのインフォメーションを聞きながら、柄を右手で持ち左の腰へと持っていった腰を落とす。残った左手を機関部に置くと、居合い抜きに似た構えになった。

深く吸い込んだ空気をゆっくり腹に落とし、緑の壁を睨む。魔力は魂の力であり、それを意識的に操る術を人は持たないが、心が乱れれば魔法も力を弱めるのは道理。はやる心臓を呼吸がなだめ、緊張感を調律する。

茂みがざわつき、沈黙を保っていた木立がささやき始めた。

次の瞬間、緑を突き破って二つの影が飛び出した。大型犬に似た四足歩行の獣で、鋭角的な体軀は日本では絶滅して久しい狼にそっくりである。だがその頭には、正面を見据える肉食獣の瞳と、広い視界を持つ草食獣のそれが一対ずつあった。

魔物。森海とともに現れた、正体不明の人類の天敵。四つ目の亜狼はガルムと呼称されていた。

嵐の喉元目がけて跳びあがった一頭に狙いを定めて、ライフフルケースを蹴りあげる。ケースは空中でガルムと激突し、空高くはじきとばした。

「機関始動。攻性魔法展開」

無骨な現代の呪文詠唱に呼应して循環型燃料電池から演算盤に力フレードが通い、嵐の魂が事象に溶け込む。

戦闘用の強力な魔法で加速された知覚と身体能力を駆使し、時間とびこえるように後続の一頭と交差。

這うような低空から、抜刀術のように演算盤が疾った。

全身のばねを使ってガルムの前足をすくい上げ、すれ違いざま、返す刀で首を刎ねる。背後で亜狼が倒れ伏す。

その勢いのまま跳躍。落下するガルムよりずっと速く上昇しながら、その胴を斬り割る。空中で裁断されたガルムは、真っ黒い体液をまき散らしながら地面にたたきつけられた。

ライフフルケースが墓標の如く地面に突き刺さったのはその直後。

嵐も鋭い軌道を描いて着地し、亜狼の死体の傍らに立つ。

驚くべきことに、二つの死体はまだ動いていた。頭と足を失い、二つに両断された体が立ち上がるとうちもがく姿は、まさに地獄の怪物だった。生物のふりをして深い森の海に潜む、人間の三十年来の隣人にして天敵。

もつとも生き物に似せている以上、いつまでも動き続けられるはずがなく、そのうちに沈黙した。

嵐も胸をなでおろす。

「周辺警戒、音波探查」

『視界内に敵なし。森はノイズが多く判別不能』

「マイクは？」

『起動中。しかし半径二十メートルで低精度』

「やっぱ安物じゃだめか」

嘆息して、ライフルケースを右手に拾い上げ、周囲を警戒しつつ下ろしてあった荷物に近づく。長居は無用。戦闘は敵をおびき寄せ

る。
リュックを背負おうとした瞬間、アオイがスピーカーの音量を跳ね上げた。

『接近警報！』

泡を食って身構えた嵐の前に、新たな魔物の一団が姿を現した。ガラムではなく、それより大型で縦長のシルエット。嵐の身長が一五〇センチだとすると、その胸ぐらいの身長を持つ二足歩行タイプ。不釣り合いに長い腕の先にはナイフのような鉤爪ぶら下がっており、口も耳もない頭には巨大な目が一つだけ配置されていた。

一つ目鬼 サイクロプスが四体。

嵐の背中をいやな汗が伝う。サイクロプスは猿のような外見に相応しい知能と身軽さを持ち、ペースにはまると手だれた魔法使いでも苦戦を強いられる。

打つべきは先手。嵐はサイクロプスに散開される前に次の魔法を紡ぐ。

インパルス・スペア
「波砕槍」

音声認識を通してふきこまれた言葉が魔法を起動させ、剣先の空気を高压の矛先として打ち出す。回避する間もなく直撃を受けた一体は、トラックにはねられたように吹き飛びながら四散した。波砕

インパルス
波形操作魔法は流体の振動を介した物理破壊に長ける。

他の三体はそのすきに散開し、嵐を取り囲もうと動いていた。ライフルケースを盾に右に回り込んだサイクロプスをいなしながら、左の一体に波砕槍を放つ。

衝撃力と振動破壊を駆使した魔法でも、サイクロプスを一撃で処理できることは少ない。真正面から不意打ちにできた一体目はともかく、今回は片腕をもぎ取っただけだった。でも時間稼ぎには十分。
フォトン・エッジ
「光刃」

タイミングを計って、盾にしていたライフルケースを薙ぎ払う。鈍器で殴られただけでも関わらず、ケースはサイクロプスを貫いてバラバラに解体した。

光子の循環によるチェインソーの前に斬れない物質は存在しない。発生場所も自由なため攻撃に防御に応用の幅が広く、バスタードソードの演算盤は常に光刃を纏っている。

魔法で高感度になった五感を巡らすと、背中に回り込んだ一体が鉤爪を振りかぶっているのがわかる。回避は間に合わない。

だが、嵐は慌てずに柄のセンサーから魔法を選択。意思的な魔法発動は音声認識だが、直感的な操作は柄の握り具合を感知させた方が速い。

瞬間、背後に高気圧の盾が形成される。滑り込んだ鉤爪が不可視の盾に穴をあけ、気圧差で噴き出した空気が敵を打ち払う。その反動で鋭く反転しながら波碎槍を叩きこみ、直撃を受けた四体目は黒い血を撒きながら絶命した。

あとは二発目の波碎槍で片腕を失い血まみれの一体。傷をかばいながら間合いを計るように移動している。十メートル近い距離があったが、魔法を使う嵐にとってそこは間合いの内。

体の正面に剣を構えて踏み切った。と同時に、突如復活したケースの重みに引きずられて、嵐は無様に尻餅をついた。バイオナノマシン生体高分子の焼けるにおいに法器を見ると、機関部が白煙を吐き出していた。
(オーバーヒート？　こんなときにっ！)

魔法という反則を失って本来の重量を思い出した体を、出来るだけ速く起こす。

思考もかなり遅くなっていて、気づいたときには、隻腕の鉤爪が目と鼻の先にあった。ケースと法器を手放しながら草の上を転がっ

てなんとか回避し、追撃される前にベルトから拳銃を抜く。森海の旅で重宝される、動作不良に強いリボルバー。

至近距離から発砲。九ミリ強装弾が連続で脳天に突き刺さり、サイクロプスは黒い血を噴きあげる。

だが、頭を碎いても数分は動き続ける魔物にただの銃弾はあまりにも非力で、たたらを踏ませることはできても殺すことはできないまま撃ち尽くす。撃鉄が空の雷管を叩く乾いた音が響いた。

銃創から流れ出た血で黒く濡れたサイクロプスが、剃刀のように鋭利な爪を振り上げる。クイックローダーを使っても再装弾は間に合わない。目が一つだけの顔が勝ち誇ったように、嵐には見えた。

（まだ、冷静。わりと）

だが、理性はまだはつきりしている。

「あきらめの、悪い！」

そんな自分を笑いながら、空の銃を盾にかざした。

ガン、と重い音が響く。だが、嵐の腕に衝撃はなく、代わりにサイクロプスの手首から先が消滅していた。

同じ砲声が轟き、頭を横殴りに吹き飛ばされたサイクロプスは地面に倒れ動かなくなる。

何が起こったのか飲み込めずに目を白黒させる嵐だったが、脇の茂みから人影が出てきたことで状況を把握する。嵐とは別タイプの森林迷彩服にヘルメットと黒いゴーグルを身に付けた青年の手には、白煙をくゆらせるソードオフ・ショットガンらしき銃があった。

彼は周囲を警戒しながら、ヘルメットから伸びたインカムにふき込んだ。

「クリア。魔法使いを一人保護した」

まだ若い声。おそらく二十代前半くらいだろう。

彼女より頭一つ分高い青年は、嵐に向きあうと視線が合う高さまで腰をおろした。

「怪我はないようだが、大丈夫か？」

「え、あ、はい」

声には気遣いの色がはつきりと含まれている。

（大丈夫、この人は敵じゃない）

助かった、ということだ。

重武装の集団が茂みから次々と現れ二人を守るように展開するのを見届けると、嵐は緊張と恐怖の反動で深くへたりこんだ。

林海都市の魔法使い3

夕闇に沈む森の中。

森海の木々に縁取られた大街道を、護衛のハンヴィーと兵員輸送トラックの一団は西へ走り続ける。壊滅的な打撃を受けた陸上交通網でも、生き残った範囲はいまだに物流の要として人々を支えている。

トラックにすし詰めになされた、深い緑の森林迷彩の彼らは、森海のマッピングや植生調査を行うために編成された、魔法使いの特別チームだった。

その中で背中を丸める、一人だけ違う規格の迷彩服が、嵐だったアオイの出していた救難信号によって救助されてからほぼ半日、親切に甘えて林海都市までの道程を共にしている。

嵐は右手に持った工具を鞘に納めて膝の上に置いた法器の機関部に差し込んで、オーバーヒートの応急修理を続けていた。

ヘックスと呼ばれるL字型の工具を使って機関部のジョイントを外し、機体の下半分ほどを取り外す。金属とタンパク質の焦げる匂いが鼻をつき、狭い荷台の中で迷惑をかけないように手早く予備パーツをセットしてジョイントを締め直した。

その手元を、隣に座っていた青年が興味深げに覗きこむ。

「器用だな」

感心した声は、嵐を助けたショットガン使いの青年のもの。名前がみかみいのりは水鏡祈里といい、林海都市の民間魔法使いだそうだ。

「直ったのか？」

「いいえ、応急処置です。ちょっとパーツが足りなくて」

六角ネジをしめる手を休めずに嵐は返した。

法器は最新技術の粋を結集した精密機械の塊であり、森海という過酷な状況下で運用するのに最も向かない兵器システムの一つに数えられる。故障を見越していくつか交換パーツは持ち歩いていたの

だが、行程に遅れを出したこともあってほとんど使いきっていた。今できる応急修理では簡単な肉体強化がせいぜいだろう。

「森海で魔法が使えないなんて、ぞっとしませんから」

魔法のないただの人間では、森海を生き残れない。応急修理でも、まったく使えないよりはましだ。

嵐はトラックにかけられた幌の隙間から、延々と続く木の壁に目をやる。

すべての始まりは四十四年前。生命を構成する素粒子が、偶然日本 の研究者によって発見された。魂の存在を肯定するその新素粒子はスピリトンと命名され、世界中の宗教にとどまらず、科学にも挑戦状をたたきつけた。

スピリトンが媒介する、新しいエネルギーが観測されたのである。後に魔力と呼ばれるその新エネルギーは、ありとあらゆる事象に干渉できる性質を有していた。

そうして、魔力を利用した事象干渉技術　魔法が確立したのが二〇三八年。紆余曲折を経て日本固有の技術となった魔法というハイテクは、たった十年で身近な生活から軍事まで幅広く浸透した。

それゆえに、人間は禁忌の領域パンドラの箱に触れてしまった。

「手際もいいな。技術系の資格か？」

「技術？種ですけど。あと、攻性は？種です」

いくら魔法が身近で不可欠な存在になっ ているとしても、民間でその力を使うには免許が必要になる。

森海の発生以後の人手不足から、専門教育や資格取得のハードルも大幅に下げられている。特に魔法使い資格にはそれを専門にする高等教育機関すら存在しており、嵐もつい先月そこを卒業したばかりの十八歳だった。

「たしか、甲海都市からの単独踏破だったな？　なんかの仕事か？」

「いえ、まだ就職してないです」

ほとんどの民間魔法使いは、それぞれ派遣会社に所属している。フリーランスがいらないわけではないが、専業の魔法使いはサラリー

マンばかりだ。都市主導の調査隊ということは、ここにいるのは林海都市にある各社の精鋭ばかりということになる。

「林海都市に行くのは、その、大学に進学するため」

「進学？　じゃあ、単独踏破は、趣味か？」

「ええと、せっかく、高校でサバイバル免許取れたんで、力試しに」

「馬鹿かお前。死んだらどうする？」

「……ごもつとものです」

感心の次は心の底から呆れられた。森海に出るには、攻性？種以上を所持したうえで、サバイバルの免許を別途とらなければならぬ。それ自体はいいのだが、森海に出るとなると装備の充実や行程の設計、安全管理の書類申請などお金も手間もかかる。そのうえでリスクは自前回避。

現に注意散漫で魔物と遭遇したうえ、法器の故障で絶体絶命のピンチに陥ったのだから返す言葉がない。

すると、荷台の誰かが陽気な調子で助け船を出してくれた。

「無茶って言うなら、水鏡も似たようなところあるだろ？」

「なに？」

誰が言ったのかまったくわからなかった風と違い、祈里は荷台のはじへ鋭い視線を向けた。祈里の眼は細いわけではないのだが、眼光には異様な迫力があつた。

「どういう意味だ？」

「自分の腰をみてみるよ」

「腰？」

祈里の横顔に向けていた視線をおろすと、腰のホルスターに細身の自動拳銃が差してあるのに気がついた。

「あ、ベレッタ……」

「森海にオートマチック持ち込んでるのだって、相当無茶だぜ」

トラックの中に気楽な笑いが広がると、祈里はさらに慥然として細身の自動拳銃を抜き、分解メンテナンスを始めた。

祈里が整備しているのは、イギリスの銃器メーカー元主力製品で、

米軍の正式採用だったこともある名銃だが、森海では故障リスクの軽減とハイパワーな弾丸が不可欠なため、小型の自動拳銃はあまり好まれない。

「いいんだよ。メンテで故障は回避できるし、中身換装してるから強装弾だつて撃てるし」

「ナノテクで強化しなくたって、いい銃はいくらでもあるじゃねえか？」

「なら俺の勝手だろ」

祈里が心なしか唇をとがらせると、なぜか荷台の空気が緩む。風も、彼のクールな印象と合致しない仕草に頬が緩んだ。

『その外装を使うのはなぜですか？』

アオイが口をはさんだ。論理的に解決できない（自分が知らない）ことには率先して質問するようにプログラムされているため、人同士の会話にも平然と入り込んでくる。

（機械に訊かれて、迷惑かな？）

そう思つて祈里の不機嫌顔を見るが、存外彼は人と話すのと同じ調子で答えた。

「特に理由はないよ。こういう古い銃が好きなんだ」

『男のこだわり、ですか？』

「まあ、そういうのかもな」

（変な人だなあ）

趣味を褒められてどことなく嬉しそうにメンテの手を弾ませる祈里を見て風は思った。使っている銃もだが、中々に個性的な性格らしい。

祈里は掃除し終え組みたてた銃を腰に戻す。ホルスターの横にはエペが差してあり、それが彼の法器だろう。法器の要である機関部と演算盤を銃に内蔵させるには、普通はライフル並の大きさが気になる。祈里はエペで増幅した魔法を銃器に出力して戦う？種魔法使いだつた。

「でも、森海の単独踏破の経験はいいかもな。いろんな奴がいるか

ら、アルバイト程度に話を聞いておいたらいい」

「ちなみに、水鏡さんのところは？」

「やめとけ、弱小だ」

素っ気なく言われるとつつきたくなるのが人情だが、機嫌が戻ってきたところにやぶ蛇もおもしろくない。

「ちゃんと仕事のある事務所を選べよ。おい、どっかバイト募集してないのか？」

それでも、補足と他のメンツに声がけをしてくれるあたり、面倒見のいい青年だと思う。

「見えてきたぞ！」

そんな折、荷台にかけられた幌の隙間から外をうかがっていた一人の声に、嵐も幌から顔を出した。春も半ばというのに冷涼な風が頬から染み渡る。日は山の影に隠れ、空の主演を月に譲っていた。

木立はいつの間にか途切れ、並走する護衛車両の向こうには広大な草原が月明かりに浮かび上がっていた。二キロにわたって整備された区画は、対魔物戦での最終防衛線だ。

そして、開けた視界のずっと先に、光の群れがあった。

星明りよりずっと力強い輝きは、人の生活の証。都市のシルエットが小山のような稜線を描くのは、建物が外縁から中央にいくにしたがって高くなっているからで、巨大な要塞都市の特徴である。

「あれが、林海都市……」

三十年前、世界は激変した。

大規模な魔法実験の失敗　魔法災害によって居住地のほとんどを森海に奪われた日本は、生き残るために様々な変化を余儀なくされた。その一つが、要塞都市。

残された土地に人々の生活の場となる巨大都市を建設し、要塞化することによって命を守る。その結果、日本各地には要塞都市と衛星都市からなる特殊な行政単位が乱立した。

その中でも特に大規模なのが、旧東京都心を基礎とする甲海都市

と、長野県にたまたま存在した森海の空白地帯に建造された林海都市だった。

近づくにつれて存在感を増す都市の影に、嵐の心臓も少しずつ鼓動を高まらせていた。

「来たよ、葵くん……」

今までの二週間とこれからの日々への期待を噛みしめるように呟いた。口にした名前には親愛の念が強くこもる。

外縁部が近づいてくると、緩衝区と外縁部の境界には強化プラスチックで編まれた有刺フェンスが見えてくる。武装した自衛官が睨みを利かせているのを見ると、やましいことがなくとも、あまり浮かれているのは気が引けた。

護衛車両を伴った一団は、フェンスの間に設けられた検問を抜けると、すぐ脇のスペースで停車した。人員点呼や積荷の確認のために乗員は次々下車する。

荷台から降りるとさっそく、調査隊とは一人だけ違う出で立ちの嵐に、クリップボードを抱えた自衛官が近づいてきた。まだ若い事務官風の優男だったが、腰にはしっかりと軍刀型の法器が差している。

「調査隊の方、ではないですね？ 魔法使い登録証を見せていただけますか？」

嵐はベルトに提げたポーチから、運転免許証のようなカードを取り出す。それを渡すと、自衛官はクリップボードのカードリーダーにカードを滑らせた。情報端末を内蔵した事務用品も今時珍しくない。

身分照会が済んだのか、彼は一転して人当たりの良い笑顔でカードを返した。

「結構です。災難でしたね」

「いえいえ、いい経験です」

カードをしまいながら、嵐も明るく答えた。前もってアオイに報告書を作らせておいて正解だった。送信は衛星を通してやっておい

てくれたのだろう。

調査隊からも祈里が説明してくれたおかげで、混乱や問題は起きなかった。嵐だけ個別に到着手続きを済ませ、また祈里を見つけてトラックに乗り込んだ。

走り出すとき少しだけ顔を出すと、さっき声をかけてきた自衛官がこちらに小さく敬礼を向けているのが見えた。

横から外を見ていた祈里が呟いた。

「伏見もうまくやっているようだな」

「知り合いだったんですか？」

「高等法院の同級生だ。去年から検問に配置されたって聞いていたんだが、出てくるときは会えなくてな。元氣そうでなにより」

基本的に自衛隊と民間の魔法使いは仲が悪い。管轄争いもさることながら、守る側の領域に守られる側が土足で上がりこんでいるわけだし、規律に縛られ融通の利かない組織に民間人が歯がゆさを感じるのも世の常だ。

だが、祈里とあの自衛官の間にはそう言ったきな臭さはまったくなかった。それどころか、気づけば最外縁を守護する自衛官のほとんどが通りすぎる車両に向けて直立し敬礼していた。最大の要塞都市である甲海都市でもあり得ない光景に、物珍しさより先に胸の奥が熱くなる。

「いいですね、こういうの」

「なにがだ？」

「……いえ」

林海都市では、これが当たり前の光景なのだ。しかし、災害後の混乱期から続く不仲が解消されるまで、どれだけの苦難があったのか。信頼関係を維持し続けている今の人々の努力を考えると、嵐は身のしまるのを感じた。

（来られて、よかった）

新しい日々のスタートラインに立つ前に、心からそう思えてよかった。これからここで魔法使いとして生きていくことを光栄に感じ

るとともに、緊張が交錯する。

都市外縁一帯は、他都市との玄関口である空港や自衛隊の施設が占めており、遠くからジェットヘリの甲高いエンジン音が聞こえた。この区画の建物の背が低いのは、大量建築のための簡易構造をしているからである。それが一キロほど続いて次の検問。

要塞都市の構造は大体一律だった。最外縁区画と居住区の外縁は厚さ五十センチほどの装甲で区切られ、巨大な都市をぐるりと取り巻いている。歴史資料で見たベルリンの壁というのに似ているかもしれないが、この壁が崩れることがあれば、それは都市の死を意味する。

壁の中に設置された門は常時開放されているが、その脇には通常火器で武装した自衛官が数名立哨していた。トラックは誘導の自衛官に従って停車し、乗員は下車させられる。

荷台からおりながら、風は祈里に尋ねた。

「なんでトラックで中までいかないんですか？」

「ん？ だってトラックみたいな大きな車は通行できない決まりだろ。ここからは歩くか、あっちのハンヴィーに相乗りするか。あとは、地下鉄だな」

「なにを当たり前のことを」と不思議そうに説明してから、祈里は風の疑問の原因に気付いた。

「ああ、そういえば甲海都市に車両規制はなかったな。甲海都市は災害以前の立体高速とかが多く残っているから、大型車両も問題ないけど、大体の都市はそんなに大きな道路は造れないからな」

「なるほど……」

そういえばそんなことがある気をする風。要塞都市計画の実施時にくらべ都市間の交流が増えているとはいえ、要塞都市はまだまだ閉鎖的である。生まれてから一度も都市を出たことのない人も珍しくない世の中、こういう認識の違いは多々あった。

荷台からおりと、壁の向こう側の喧騒がかすかに漂ってきた。人々の話声にポップな歌声、食欲を誘う香り。旅の間にも中継地点

で人とは接してきたが、こういう賑やかさは久しぶりで、故郷とは別の都市なのに懐かしさが心の片隅で滲む。

都市外仕様のトラックはエレベーターで地下に格納されていき、降車した面々はそれぞれ護衛用や迎えの車両に乗り込んでいった。まう。祈里も、一台のハンヴィーに呼ばれていた。

「乗って行くか？」

「いえ、そこまでお世話になるのは」

「そっか。地下鉄の駅は、門入って左だ」

「ありがとうございます」

検問を指差す祈里に風が頭をさげると、彼は照れ臭そうに鼻の頭をかいた。

「まあ、ほどほどにがんばれよ」

言い残し、彼は明らかに車載限界を越えたハンヴィーによじ登った。風はその背中に、いや、出発準備中やもう動きだした車両の魔法使いたちに向けて、大声を張り上げた。

「ありがとうございますっ！」

そうして深々と頭を下げた背中に、「じゃあね」とか「またな」とか様々な声がかけられ、通り過ぎていく。ほんの数秒間の言葉たちを胸にしまいなおし、風は頭をあげた。もう誰もいなかった。

「じゃ、いこっか」

「イエス・マイ・マスター」

洒落を利かせた返答をするアオイに微笑み、林海都市の城壁を見上げた。

森海を歩き続けた二週間と、これから始まる新しい時間。それぞれに思いをはせながら、風は都市内へと足を向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0538z/>

ウィザース・ネクサス

2011年12月1日23時46分発行